



ピースデポ

平和資料協同組合

Peace Depot (Peace Resources Cooperative)

発行人: 梅林宏道 / 住所: 〒223-0051 横浜市港北区箕輪町3-3-1日吉グリーネ102
 TEL: 045-563-5101 / FAX: 045-563-9907 / E-mail: office@peacedepot.org
 郵便振替: 00250-1-41182 特定非営利活動法人ピースデポ
 銀行口座: 横浜銀行日吉支店 普通 1561710 特定非営利活動法人ピースデポ

総会で
新しい
決定！
試み

いっしょに平和のインフラを 作りませんか

— 小さな「ひとつの力」が
つながって「大きな力」が生まれます —

「ひとつの力」キャンペーン

今年の総会で決定した2005年事業計画の最大の目玉は、「ひとつの力」キャンペーンというものです。ピースデポ発足に先立つ1995年に創刊された「核兵器・核実験モニター」の創刊10周年を記念して取り組む事業です。この10年間に培われた人と人のつながり=人的ネットワークは、ピースデポの大事な財産です。その一つ一つは小さくても、会員・読者・支持者のかけがえのない「ひとつの力」が集まることによって、ピースデポの活動を支える社会的・財政的基盤を確立するための大きな力を生むことができるでしょう。みんなで「平和のインフラ」を作りたい、そんな思いから、この人的ネットワークを活かし、拡充しながら、ピースデポの活動への会員・読者・支持者の参画の機会を拡大する一連の活動に取り組みます。それが、「ひとつの力」キャンペーンです。

あなたの力を貸してください

具体的な取り組みとして、会員「スキルバンク」を作ります。また、メーリングリストなどを使った会員との双方向通信をはじめます。

「スキルバンク」というのは、会員の皆さんの「得意な仕事」、例えば、ホームページを作る、イラストが書ける、集会の段取りはプロ並だ、発送作業やピラまきなら任せておけ…などなどの形でリスト化して、それぞれの持てる「ひとつの力」をピースデポのために出し合ってもらおうというものです。

この「ひとつの力」の動きは、総会前から立ち上がっている若手ボランティア中心の「核軍縮ワークショップ」シリーズや、イラストレーターがボランティアとして参加した同封のジャバラ冊子作成などに見ることができます。もちろんこれまでピースデポの活動を支え続けている発送や翻訳ボランティアの協力もすべて「ひとつの力」です。

「ひとつの力」の結集は、ピースデポが日本の市民社会によりいっそう根を広げていく「アウトリーチ力」の強化となるのです。

ぜひ、私たちと一緒に平和のインフラを作っていきましょう。

第6回総会報告

田巻一彦(ピースデポ副代表)

2月20日の日曜日、前夜からの雨がまだ少し残る肌寒い朝、ピースデポは第6回総会を東京の日本青年館で開きました。前日の19日には、同じ建物の中で総会関連イベントとして「核廃絶は市民の手から!NPT市民集会」が、ピースデポも参加する実行委員会の主催で開かれました(詳細は4ページ)。

会員の皆さまへボーナス特典!
ピースデポの最新刊を差し上げます。

★日韓ツイン・ブックレット
『東北アジア非核地帯』

★ジャバラ冊子
『なくなるのはいつ?—未来のためのガイドブック—』

追加購入大歓迎! ぜひご活用ください!!



集会の興奮を体の中に残しつつ、九州や関西など遠方からの参加者も含めて22人の会員の皆さんが総会に参加してくださいました。

総会での議論は、出席者数を上回る豊富で活発な内容でした。連日の行動でお疲れの中、足を運んでくださり、意義深い討論をしてくださった皆様、そして参加はできなかったけれど、メッセージを寄せてくださった

皆様にあらためて感謝いたします。

「会員とともにある」という 当たり前の「再発見」から

2005年事業計画を作るにあたり、私たちの心の中にあった想いを一言で言えば、「ピースデポは会員の皆さんによって支えられている」というものでした。

2005年が核廃絶と軍縮という課題に持つ歴史的意義に対して、取り組むべき課題の多様さと大きさ。財政問題を含む組織的困難。これらの問題の前で圧倒され、時にたじろぎしながらも、この冬、私たちは総会議案を書きながら、余りにも当たり前すぎるのですが、「ピースデポは理事会と事務局のものではない。会員の皆さんの財産なのだ」という「発見」をしたことは私たちを強く勇気づけるものでした。

実際、月2回の情報誌の発行やその他の活動が2、3人の常勤スタッフという小所帯で支えられていることを知ってびっくりされることがあります。そうなのです。今だって理事会とスタッフだけでこれだけのことができていくわけではないですし、スタッフはもう毎日アップアップしながら目の前の仕事に追われているのが現実です。「こんなに力があるんだから、助けてあげる必要もないな」と思っていた、という人に「とんでもない」と一所懸命説明したことがあります。泣き言も含めて。

平和運動という無数の人々のボランティアによって支えられた営みと深く結びつきながら、「調査・情報活動」という特定の分野での仕事を事業として成立させる、2000年にNPO法人としてスタートしたピースデポはそれ自体「社会的な実験」であり、「ベンチャー＝冒険」である、と田巻は前にもこの会報で書きました。この「社会的ベンチャービジネス」が今後発展的に継続していけるのか、NPOとしての発足から5年にあたる2005年は、ピースデポにとっても「節目の年」なのだと思うのです。

もちろん、私たちは核軍縮・平和問題でピースデポが果たしてきた社会への貢献に胸をはってご報告することができます。例えば、沖縄の普天間代替基地問題。宜野湾市・伊波市長の果敢な行動が米国政府の政策を動かし、新しい局面が開かれようとしています。そこではピースデポが築いた国際的な情報収集ネットワークとそこから得られたタイムリーな情報の提供が大きな役割を果たしました。核軍縮の世界では、モデル「東北アジア非核兵器地帯条約」の提案などで、ピースデポの仕事は、国内的にも国際的にも、議論を主導する位置にあります。これらの活動が会員の皆さまからの絶え間ない物心両面からの支援があってはじめて実現したことです。

しかし、と私たちは考えました。会員の皆さんと理事会・事務局との間の関係はどうだったろうか。もっと双方向的な関係を築けなかったのだろうか。このような反省も踏まえながら、事業計画を書きました。

総会での討論から 「もっとシャープな打ち出しを」

総会では、いくつもの(時には厳しい)ご指摘をいただき、さらに考えを深めることができました。その一部を紹介します。

「ピースデポはいい出版物を出しているがもっと営業意識を持つ必要があるのではないか」(意識はあるのですが、手が回らない、というのが実情ですと筆者はお答えしました)、「事業体ならば、〈選択と集中〉、つまり不採算事業からの撤退とリソースの集中という発想も必要。本の在庫を抱えるぐらいなら、ウェブで情報発信を」、「もっと一般会員に目を向けた資料作成を」。対して理事からは、基本的にはそのとおりと思いつつも、「ピースデポは〈平和資料協同組合〉という名前が示すように、市民が出資し、〈平和〉を配当して受け取るという当初の設立理念がある。会員との間の〈対価とサービス〉という関係が、これとどのように重なるのか、重ならないのか、掘り下げて考えたい」と答えました。またある会員からは「〈ひとつの力〉キャンペーンは一般的すぎないか。現有スタッフの力量も見極めながらもっとシャープな考え方を打ち出してほしい」、「せっかく良い情報があるのだから、生協など大組織とのコラボレーションももっと検討するべきではないか」という指摘もありました。ここにすべてをご紹介することはできませんが、理念レベルから具体的事業展開レベルまで、幅広い領域にわたる意見をいただくことができました。ピースデポの今後のあり方にとって極めて重要な視点を提供するものでした。理事会の中にも微妙に相反する想いが交錯しており、すべての議論にシャープにお答えすることができたとはいえませんが、今後議論を深めて、具体的な方針へと展開していきたいと考えています。

いささか手前味噌かもしれませんが、「ひとつの力」という投げかけが、出席された皆さんの心の琴線にとどき、このような活発な議論に発展したものと理解しています。

最後に、今回の総会は前日の集会と同時並行で準備するという、きわめてタイトなスケジュールの中で開催しました。これを乗り切れたのは、ボランティア、会員の皆さんの文字通りの〈ひとつの力〉の結集でありました。一人一人お名前は挙げませんが、ありがとうございました。



2005年2月20日、日本青年館にてピースデポ総会。

総会で決まった今年の主な事業計画

(全文はホームページ、<http://www.peacedepot.org/whatspd.actvty.html>に掲載)

◆5つの基本方針

1. 被爆60年・NPT再検討会議に向けた集中的とり組み
2. 北東アジア地域安全保障へのとり組み
3. 財政健全化に向けた「中期ビジョン」計画の点検と改善
4. アウトリーチ強化による平和運動の層の拡大への貢献
5. モニター創刊10周年と「ひとつの力」キャンペーン展開

◆事業計画

1. NPT再検討会議に関連するとり組み
2. 「北東アジア地域安全保障の枠組み」研究のまとめ・普及
3. 「核兵器・核実験モニター」継続とビジュアル資料、インタビュー記事などの新企画
4. イアブック「核軍縮・平和・自治体」発行と商業出版化
5. 「核軍縮：日本の成績表」の継続
6. 核軍縮議員ネットワーク(PNND)支援
7. 日本の情報公開法を活用した防衛・外交問題の調査
8. 調査プロジェクト「米軍」の継続
9. 「平和フロンティア講座」などの公開講演会・セミナー等の開催

◆組織体制の整備

1. 中期ビジョン委員会の継続とフォローアップ
2. 会員、出版物読者の拡大
3. 「ひとつの力」による人的ネットワークの拡充・活性化
4. ボランティア、インターンなどの参加拡大
5. 企業・個人寄付金・助成金の開拓

欠席の会員からのメッセージ

(50音順、一部編集部で編集)

●北東アジアの平和のために主軸をになって提案・活動を行っていることに感謝します。「ひとつの力」キャンペーンも人的ネットワークを活かした良い取り組み。市民社会への浸透をはかり収入増へつなげるため、「支えなければ」と思っています。(小谷美智子)

●今年は、憲法問題はもとより、NPT再検討会議など本当に重要な年と認識しています。いつも充実した問題提起や資料などありがたく思っています。(川路孝)

●北朝鮮の核兵器開発等を背景とした、非軍事志向の後退という現実的課題が山積し、核兵器廃絶への関心を形成していくのが難しい状況で、一般市民には見えにくい米軍の意図や動きを見える形にすること、北東アジア非核地帯化の実現可能性を広く普及していくことは、武力によらない安全保障や国際貢献という世論形成に強い力になると思います。これからも地道な資料の提供をお願いします。(高橋紀代子)

●成績評価表の作成、本当にご苦勞様でした。心から敬意を表します。それにしてもアメリカプッシュ政権の非協力姿勢、腹立たしい思いです。核保有国の誠意ある努力姿勢が待たれます。北朝鮮の6カ国協議拒否も気がかりです。(竹村泰子)

●運営上のご苦勞は尽きないと思いますが、核問題のシンクタンクとして、また核兵器廃絶運動の理論的支柱として、この上ともご健闘くださるよう切にお祈りします。(土山秀夫)

●ニュースレターが読みやすくなりました。特に凶解がうれいしです。(長谷川りょう子)

●今年は終戦60年記念。加えてアジアの子のツナミ・エイド・ジャパン。2月末のスペシャル・オリンピック長野大会など、やるべきことは多く身体はひとつ。時間もお金も足りません。でもお互いがんばりましょう。(湯川れい子)

ピースデポの最新刊を「平和のインフラ」整備にお役立て下さい!

ピースデポが今年発行した2つの新しい出版物を会員の皆さまにお贈りします。

これは、ピースデポの活動を支え続けてくださっている皆さまへの感謝の気持ちであると同時に、皆さまにこれら出版物を活用していただきたいというお願いです。「平和のインフラ」の基盤整備の一環として、今後、各地での平和活動にぜひお役立てください。

東北アジア非核地帯の重要性を日韓の専門家がわかりやすく解説した「日韓ツイン・ブックレット『東北アジア非核地帯』」は、セミナー・勉強会などのテキストとしてご活用いただきたい一冊です。また、初めての方でも気軽に手に取りやすい「ジャバラ冊子『なくなるのはいつ?—未来のためのガイドブック』」は、平和イベントの配布物などとしてお役立てください。

もちろん、使い方はこれらに限りません。さまざまに工夫して使ってください。「こんな使い方がある」「こんなことをやってみた」など、アイデアやご提案、それから各地で実際にお使いになった報告など、ぜひお知らせください。

★追加でご入用の方は、事務局まで。

ツイン・ブックレットは一冊300円、ジャバラ冊子は一部100円です。ともに送料別。(大量部数ご希望の方はご相談ください)。

神奈川新聞、2005年4月25日に掲載されました!

日韓の平和団体 ブックレット共同出版

東アジアを非核地帯に

市民連帯と打開策提言



東北アジア非核地帯の重要性を日韓の専門家がわかりやすく解説した「日韓ツイン・ブックレット『東北アジア非核地帯』」は、セミナー・勉強会などのテキストとしてご活用いただきたい一冊です。また、初めての方でも気軽に手に取りやすい「ジャバラ冊子『なくなるのはいつ?—未来のためのガイドブック』」は、平和イベントの配布物などとしてお役立てください。

ピースデポ総会記念イベント：核廃絶は市民の手から —被爆60年を転換の年に！NPT市民集会

2月19日、東京の日本青年館で、総会記念イベント「核廃絶は市民の手から 被爆60年を転換の年に！NPT市民集会」が開催された。広島、長崎両市長、国会議員、被爆者、海外ゲストらの発言を受けて、300人を超す参加者は終始熱気ある議論を行った。集会プログラムを5ページに掲載する。

主催は、16団体、37個人が参加する「2.19実行委員会」。呼びかけは、核兵器廃絶市民連絡会、核兵器廃絶をめざすヒロシマ

の会(HANWA)、核兵器廃絶ナガサキ市民会議の3団体である。日本各地の6団体、158個人が賛同した。

集会最後には、「アピール」が採択され、21日に外務大臣宛てに提出された。また、英訳されたアピールは、再検討会議の議長を務めるブラジルのドゥアルテ大使をはじめ、5核保有国、NACなど関係各国にも提出された。(アピール全文は、<http://www.peacedepot.org/theme/city/219appeal.html>に掲載。)

被爆者の声に応え、時代をつなぐ 「鎖」のひとつに

—2.19NPT市民集会感想—

塚田晋一郎(明治学院大学2年)

2月19日に行われた「核廃絶は市民の手から 被爆60年を転換の年に！NPT市民集会」は、会場の日本青年館・中ホールがいっぱいになり、全国から300人が集まり、とても賑やかでした。僕は最近、ピースデポでボランティアを始めたところなので、大きなイベントに参加するのは今回が初めてでした。僕は最初、受付をしていて、集会が始まってから会場に入りました。主催者あいさつに続いて、早速、秋葉広島市長のお話が始まりました。

秋葉市長のお話を生で聞くのは、昨年の8月6日、広島平和記念公園での平和宣言以来でした。あの夏の、広島暑い日差しとは打って変わって、冬の冷たい風が吹く東京で聞くお話でしたが、同じように熱く胸に訴えてくるものがありました。秋葉市長は、平和市長会議が提唱している「2010年のNPT再検討会議において『核兵器禁止条約』を締結し、2020年までに核のない世界を実現する」という内容の「2020ビジョン」を今後どのように展開していくのかを説明してくれました。

秋葉市長は、「国際条約の中で、核保有国に対して、核兵器の削減努力義務を課しているのはNPTだけであり、NPTが無くなれば、世界は暗闇になり無法状態になる。今年の5月(再検討会議)は出発点で、ここからどうやって、世界へより広く、より力強い努力を集めていけるかを考えなければならない」というようなことを言われました。そして、「世界の世論は今、私たちとまったく同じ方向を向いている」と述べました。実際に、欧州議会や全米市長会議において、2020ビジョンは圧倒的多数の賛成で可決されており、これらは世界の論調を如実に表していると思います。しかしその一方で、NPT再検討会議においては、アメリカの「使える核」開発の問題や、北朝鮮の核を巡る多国間

協議の今後のゆくえなど、核廃絶への道を後戻りさせる不安定材料には事欠きません。

こうしたことを考えると、今年の5月の再検討会議がいかに重要であるかを感じます。と同時に、2020ビジョンのステップ2にあたる今年の8月9日までの「核兵器のない世界を作るための記憶と行動の1年」において、私たち市民レベルで、実質的に核廃絶への道筋を付けるような取り組みとして何が出来るかというのは、すごく難しい問題ですが、僕も大学など、自分の周りで何かしらの取り組みをしていきたいと思っています。

そして、秋葉広島市長の次に壇上に立たれたのは、伊藤長崎市長でした。市民レベルでの集会で、広島、長崎両市長が揃うというのは、意外にも今回が初めてだということです。それだけをとっても、大きく意味のある集会だったと言えるのではないかと思います。

伊藤市長のお話を聞くのも、昨年の8月9日、長崎の平和公園での式典以来でした。今回の伊藤市長は、非常にテンポよく、時には笑いを織り交ぜながら、聞き手のことを考えた、親しみやすい語り口でお話をしてくれました。心に、強くがっしりと響いてくる秋葉市長の語り口とはまた趣のこととなった語り口で、この二人の市長のタッグの確かさを感じることができ、とても心強く思いました。そして、この二人の市長の想いと、日本政府や外務省がうまく結びついていけばいいのにと思いました。

その後のパネルディスカッションでは、国会議員を含めたパネリストと、会場からの質問によって、とても内容のある話し合いが展開されました。特に、スージー・スナイダーさんが言われた「日本が非核・平和を唱えると、非常にインパクトがある。平和をうたう日本国憲法は素晴らしいものであり、第9条を改正しようという動きは非常に心配する。日本はアメリカの核の





傘から脱すれば、国際社会での発言力が増すので、脱すべきである。また、日本は国連への取り組みにおいて、「平和の文化」をつくることに貢献してきているので、「戦争の文化」をつくり出すアメリカのミサイル防衛を支持すべきではない」といった言葉には、国際社会の側からみた日本の今のあり方も彷彿とさせ、非常に示唆に富み、将来の日本のあるべき姿を想像させてくれる、大変貴重なお話でした。

集会の最後の方では、日本被団協の岩佐幹三さんが「被爆者は訴える」としてお話をされました。その中で、自らの被爆体験を語られ、その最後に、「私たちは一人ひとりが人生の主人公なんです。民主主義ですから」と、大きな手振りと共に言われました。この言葉は、この集会の中で、僕の心に一番深く届いた言葉でした。僕は昨年度、大学で「広島・長崎講座」というものを受講したのですが、その時も、広島から来ていただいた被爆者の方がしてくださった被爆体験のお話が一番深く印象に残っていて、脳裏に強く焼きついています。

岩佐さんのお話は、戦争を知らない世代の子どもである僕たちが、原爆の卑劣さや、核兵器の不必要さを、今、そして今後において、できる限り風化させずに語り継いでいくことの意味の大きさを再認識させてくれました。今後、自分が時代を繋いでいく鎖の中の一つであることを忘れずに、自分なりに取り組んでいけたらいいと思います。

今回の集会は、様々な人が参加されていたので、多様な考えに触れることができ、とても有意義なものでした。この経験を踏まえて、5月にニューヨークへ行き、再検討会議に参加し、微力ながらピースデポのワークショップのお手伝いをしたいと思います。

<プログラム>

- 主催者あいさつ 内藤雅義(実行委員長)
- 被爆地の市長は訴える 秋葉忠利 広島市長
伊藤一長 長崎市長
- 日本の核軍縮努力を採点する 土山秀夫(元長崎大学学長)
- 国会議員とトコトン対話
パネリスト: 中川正春議員(衆、民主党) / 井上哲士議員
(参、共産党) / 土山秀夫(元長崎大学学長) /
スージー・スナイダー(婦人国際平和自由連
盟・事務局長)
- コーディネーター: 梅林宏道(ピースデポ代表)
- 招待講演「核兵器は廃絶できる」 スージー・スナイダー
質疑応答
- スライドショー 初公開!「核問題入門キット」
- 被爆者は訴える 岩佐幹三(日本被団協・事務局次長)
- NPT再検討会議に向けた市民からの提案
- 閉会あいさつ 湯浅一郎(核兵器廃絶をめざすヒロシマの会)

新スタッフ紹介 平和への思いを形に

丸茂明美
まるも あけみ

2004年11月からピースデポスタッフとして勤務しています。

人生と仕事のキャリアが長いのが自慢?です。ベビーブーマーの一人として、いつもどこでも「混雑して」いる中で好奇心いっぱいに大学まで過ごし、その後30数年間、子供ふたりと、自分も成長しながら横浜市役所で働きました。



2003年、持ち続けた好奇心のまま英国ヨーク大学へ1年間留学、大学

院政治学科で紛争後の平和構築、社会開発について勉強しました。そのコースを選択した理由は、大学で歴史を学んだことからずっと持ち続けていた社会発展の動きへの関心と、その後自治体でのさまざまな仕事を通して得た知識を、国際的視野で深めてみたいと感じたからです。もちろん、ヨークシャー在住の親しい友人の存在が大いに私を後押ししてくれたのですが。

ピースデポスタッフとして採用が決まったことは、私にとって英国留学の感動の次に来た大感激でした。1月の総会開催時はフルタイムで勤務していましたが、その後、長時間の激務(!)で体調管理が行き届かず、4月1日から勤務条件を変更し、嘱託として主に経理業務と、資料収集などの研究補助業務を担当しています。現在、在日米軍再編に関する資料収集・年表作成のほか、「核軍縮・平和イアブック2005」の編集にあたります。調査・研究、執筆の分野でこれまで以上に会員の皆様のご協力をお願いする次第です。

誰もが願う、それでいて何と遠い世界平和の課題。英国での勉強中にクラスメイトから直接聴いたアフガニスタン、コンゴ、スーダンの紛争と人々の苦境、5週間でしたが自分で見てきたスリランカの混乱とそこに暮らす人々のあきらめないパワーを思い起こしながら、今日本の状況を変えるための実際の力となっているピースデポで、ささやかですが大切な仕事を精一杯努めたいと思います。どうぞよろしくお願いします。

編集後記

核廃絶への願いと意気込みを確認しあった「2.19市民集会」と、翌日開催

されたピースデポ第6回総会を特集しました。盛会だった総会では、ピースデポ役員・事務局へ、皆様から大きな評価・激励とあわせ、種々お叱りも受けました。被爆から60年の大切なこの1年、事務局の一員として活動をどう効率的にすすめていくか、会員の皆様のご意見を得ながら考えていきたいと思えます。この紙面がその一助をなることを願っています。(丸茂)

